チェンジ・ザ・ワールド

石原哲也

※『チェンジ・ザ・ワールド』は、2001 年、福島県立小名浜高校演劇部が初演。
2002 年第 48 回全国高等学校演劇大会（神奈川県開催）において、同校演劇部が上演し、
最優秀賞を受賞しました。また、第 38 回斎田喬戯曲賞受賞を受賞しました。
戯曲デジタルアーカイブにアップした今回のバージョンは、作者本人が修正した 2023 年版です。

※上演許可について
以下の住所に郵送でお問い合わせください。
〒973-8043
福島県いわき市中央台鹿島 3-33-19
石原哲也

※「戯曲デジタルアーカイブ」掲載の PDF 原稿制作にあたり、晩成書房の協力を頂戴しました。
「高校演劇石原哲也脚本集」（晩成書房　刊）には、本作をはじめ、以下 12 作品が収録されています。
『コンバット･マーチ』『Ａマイナー』『たくらんけ』『停学の名人』『モーニング･サービス』
『それぞれに如月』『俺たちの甲子園』『三人家族』『シャドー･ボクシング』『ちゃぶ台の詩』
『クロスロード』『チェジ・ザ・ワールド』
ISBN　4-89380-316-6　978-4-89380-316-0　　2,500 円＋税／**残部僅少**
書籍問い合わせ先　晩成書房　mail@bansei.co.jp

チェンジ・ザ・ワールド

石原　哲也

【登場人物】

柳　健一(ヤナ)
北沢正平(正ちゃん)
山崎雄次(ヤマちゃん)
平山光一(ヒラ)
大井川祐子(主任看護師)
柳の母
三の宮和子
若い女の先生

テーマ曲が流れて幕が上がる。
若い女の先生が、一人座っている。
上手から北沢が現われる。テーマ曲ＦＯ。

北沢　なんだよ先生、頼みって。

先生　うん、いま話すけどさ、その前にね北沢……ちょっと座って。北沢も平山もさあ、山崎に引っ張られてるんじゃないかなあ。

北沢　……。

先生 イジメもさ、山崎につきあってさ、しょうがなくてやってんじゃないの。

北沢 イジメなんかやってねえよ、誰も。

先生 山崎はみんなに怖がられてるんだってね。こわいのあんたたちでも。

北沢 いいかげんにしろよ先生。友達だよ、俺たちは。

先生 山崎は三年生の悪い連中ともつながってるんでしょう。

北沢 関係ねえだろう、そんなこと！

先生 ……関係あるから言ってんだよ！

北沢 ……！

先生 ……。

北沢 それより、なんだよ頼みって。

先生 あそうか、そうだったね。あのねえ、見舞いに行ってほしいのよ、入院してる柳のところへ。

北沢 俺が。なんで。

先生 柳は転校して来て間もなく入院してしまったでしょう。だから、クラスメートといっても、ほとんど知らないのよね、お互いに。

北沢 俺だって知らないよ、なんにも。

先生 それでね、この間あたしが見舞いに行った時にね、聞いたのよ柳に。今度のお見舞いは、クラスの誰に来てほしかって。そしたら北沢くんがいいって言うのよ。

北沢 なんだよそれ。やだよ俺。

先生 あのね、柳が転　校して来てまもなく球技大会があったよね。同じチームだったんでしょう、柳と。

北沢 ああ、そうだ。あいつバスケに出てさ、(ちょっと笑って)下手くそなんだけど、ものすごく一生懸命でさ。

先生 あのとき、試合中に柳が相手の選手とぶつかってさ、殴られそうになったんだってね。そうでしょう。

北沢 ああ、まあね。

先生 あんた、柳をかばってさ、相手を殴って退場になったんだってね。

北沢 て言うか、あれは相手が完全に悪いんだよ。自分からぶつかったくせに柳に文句つけてきたんだよ。

先生 柳がね、言ってたよ。自分のために喧嘩してくれた友達は初めてだって。その後、あんたが退場したあとね、試合中ずっと涙流しながら走ってたんだって。うれしくて。

北沢 ……。

先生 だから、どうしても北沢に会って一度お礼が言いたいんだって。

北沢 別によ、俺、あいつのために喧嘩したわけじゃねえよ。

先生 でもいいじゃない、柳がそんなに喜んでるんだから。だから、見舞いに行ってやってよ。ね、いいでしょう。

北沢 いいよ、俺。遠慮するよ。

先生 どうして。

北沢　……。

先生　とにかく、一度だけでいいから行ってやってよ。先生からもお願い。ね、北沢。

北沢　わかったよ。そのうち暇があったら行ってみるよ。

先生　それじゃダメなのよ。できたら、明日にでもいってほしいのよ。

北沢　なんでだよ。

先生　……とにかく、早めに行ってほしいのよ。

北沢　だから、なんでだよ。

先生　柳はガンなの。長くて半年しかもたないんだって。

北沢　……！

シルエットになる。

シルエットの状態で、先生は上手に去り、すれ違うように山崎と平山が登場する。

明かりが戻って、夜の戸外。公園のようなところ。

平山　そうかあ、柳はガンなのかあ。

北沢　誰にも言うなよ、ヒラ。

平山　ああ、わかってるよ。かわいそうだよなあ、しかし。行くのか、見舞いに。

平山はペットボトルから何か飲む。平山はいつもペッ

トボトルを持っている。

北沢 うん、行くしかねえだろうな。

山崎 行ってやれよ、正ちゃん。ボランティアだよ、ボランティア。第一、正ちゃんは柳を助けた正義の味方だもんなあ。かっこいいよ、やっぱ。

北沢 そんな、冗談じゃねえよ。俺はさ……。

山崎 ヒラ、電話しろよ、安川に。

平山 えっ……。

北沢 ……ヤマちゃん、あのさ……まだ、ちょっとやばいんじゃねえかな。

山崎 ……。

平山 謹慎終わってまだ一週間だしよ。今度チクられたら間違いなく退学だぜ、ヤマちゃん。

山崎 大丈夫だよ。ちゃんと痛めれば、チクらねえよ。この前は少し痛め方が中途半端だったんだよな。もっと完全に痛めれば、チクる元気もなくなるんだよ。

平山 そういうもんかな。

山崎 そういうもんだよ。な、正ちゃん、いいだろう。

北沢 ……よし、やるかあ。あの野郎、先生にチクりやがって。どっちにしてもこのままじゃすまされねえもんなあ。

山崎 よし、決まった。ヒラ、電話。

平山 よっしゃ！(ケータイを押そうとして)だけど、もうケータ

イに出ねえんじゃないかな、あいつ。

山崎 今日、体育の時間によ、ケータイに出なけりゃどうなるか、ちゃんと教えておいたからよ。大丈夫だよ。

平山 さすがあ……。

テーマ曲が流れ、再びシルエットになる。シルエットのまま転換。

三人は上手に去り、入れ替わりに柳が入って来てベッドに座る。

明るくなると、柳のいる病室。テーマ曲そのまま続いてる。

柳はベッドの上に半身おこして雑誌かなにか見ている。

北沢 (上手から顔を出して)あのー、柳くんいますか。

柳 はい、どうぞ。あーっ、北沢君、来てくれたんだ。(ラジカセを止める)

北沢 おう、先生がさ、ちょっと行ってみろって……言うし、俺もちょっと来てみたかったんでさ……どうだ、元気か。

柳 うん、まあ。

北沢 あそうか、元気じゃねえよな。入院してるんだもんな。

柳 うん。でも、今日はけっこう調子いいんだ。

北沢 そうか。ならいいけど。

柳 座って、座って。(イスを勧める)

北沢 ああ。(座って)……あ、今聴いてたのクラプトンじゃねえか。

柳 うん、そう！　北沢くんも好きなのクラプトン！

北沢 うん、まあ。あまり詳しくはねえけどさ。なんて曲だいまの。

柳 チェンジ・ザ・ワールド。

北沢 そうか、これがそうか。いい曲だよな。

柳 北沢くん、頼みがあるんだけどいいかな。

北沢 ああ、……いいけど……なに。

柳 俺とさ、親友になってくれないかな。

北沢 えっ……。(びびる)

柳 実はお袋がさ、転校したせいで友達もいなくてかわいそうだかわいそうだってうるさいからさ、俺にはもう北沢っていう親友がいるって、言っちゃったんだよ。お袋いま洗濯してるんだけど、すぐここに来るからさ、来たら、話を会わせてくれないかな。

北沢 なんだ、そうか。(小声で)びっくりしたあ。

柳 なに？

北沢 あ、なんでもねえよ。わかった、まかせろ。親友ごっこをやればいいんだろう。

柳 うん、頼むよ北沢くん。親友ごっこかあ。いいなあ、それ。

北沢 そうなると……、北沢くんはねえだろう。正ちゃんにしろよ、正ちゃん。

柳 そうか、そうだよね、親友だからね。じゃあ頼むぜ、正ちゃん。

北沢 おう、うまい、うまい。

二人が笑ったところへ、柳の母と主任看護士の大井川が入って来る。

主任 健一くん、検温ですよー。(体温計を渡しながら) なんか楽しそうねえ。お友達。

柳 うん、おれの仲間です。母さん、ほら、いつも話してる、北沢正平くんだよ。

母 ああ、あなたが北沢さんですか。健一はいつもあなたのことを話してるんですよ。まあ、そうですか。ほんとに健一がお世話になったそうで……。(泣きそうになって目頭をおさえる)

柳 なにやってんだよ、母さん。あのね北……正ちゃん、お袋はさ、俺には正ちゃんという親友がいると何度いっても信じなくてさ……だから言ったろう母さん。

北沢 俺もヤナのことはずっと気になってたんだけどね、放課後は毎日バイトやってるもんだから、なかなか見舞いにこれなくて悪かったよオ。(棒読み)

柳 いいんだよそんなことオ。そうかあ、バイトかあ。俺はさあ、正ちゃん、またタバコ見つかって謹慎でもくってるのか

と思ってたよオ。（棒読み）

北沢 ばかやろう、変なこと言うなよヤナ。それじゃ俺が不良みたいじゃねえかよオ。

柳 あれ、違うの。

北沢 この野郎。

北沢が柳の首を締める真似をして二人でふざける。

主任 こらこら、病院だよここは。

静かになるがやはり二人で笑いながらふざけている。

母 すみません。（主任に頭をさげてから）でも、健一のこんな明るい顔見たのは、わたし……。（また泣きそうになる）健一、母さんちょっとジュースでも買ってくるから。（涙を隠すように上手に去る）

母を見送ってなんとなくほっとする二人。

柳 （はっと気づいて）あ正ちゃん、こちらは主任看護師の大井川さんだよ。

北沢 どうも。ヤナが大変お世話になっちゃって……おります。

（主任に挨拶する）

主任……なんかさあ、さっきからさあ、あんたたちの台詞、芝居っぽくない。

二人えっ！……。

主任（黙って柳の方へ手を出す）

柳……？（にっこりして、主任の手を握る）

主任……！　体温計！

柳えっ、あ、そうか……はは……。（慌てて体温計を出して渡す）

北沢（吹き出して、笑いが止まらない。柳の頭をこづく）

主任とにかく、あまり騒いではだめよ。それから面会は三十分以内。いいわね。

二人はい！　わかりましたあ！

主任（行きかけて振り向き）なんか怪しいなあ。行ってしまう）

テーマ曲が流れて。シルエット転換。

北沢は着替えて再び出て来る。

テーマ曲流れたまま明るくなる。

柳の病室。北沢と柳が二人でなにかふざけている。

テーマ曲ＦＯ。

主任こら、また騒いでるな、ここは病院だっていってるでしょう。正平くん。

北沢 はい！

主任 うるさいからね、はっきり言って。毎日来てくれるのはいけど、静かにね、静かに。

北沢 はい、すみません。

主任 柳くん、あんまり張り切ると、疲れが出て後が苦しいからね。無理してはダメだよ。

北沢 じゃあ、俺そろそろ帰るわ。(立ち上がる)

主任 いいわよ、まだ帰らなくたって。

北沢 いいの。

主任 いいわよ。でも、あと二十分。そして静かに！　いいわね！

二人 はい！　(主任は去る)

北沢 おっかねぇ！(二人で笑う)さっきの続きだけどよ、ヤナおまえよ、死ぬ前にさ……。

柳 ……。なんだよ、別にどうってことないだろう。俺ガンなんだし、いつ死んでもおかしくないんだから。全然気にしなくていいよ、正ちゃん。

北沢 ……。

柳 誰も隠すわけにはいかないよ。薬で髪の毛もみんな抜ちゃったしさ。現実だよこれは。だから気にしなくて いいんだよ正ちゃん。

北沢 いや、よくねえよ。ガンはガンだけど、ちゃんと治るって医者も言ってんだろう。治るよ絶対。だから、そういう意味

で言ったんじゃなくてよ、要するに、いまどうしてもやりたいことがなんか無えかって聞きたかったんだよ俺は。

柳 わかってるよ。(指を折って数えて)三つあるなあ。

北沢 三つもあんのかよ。

柳 うん、死ぬ前にやりたいことが三つある。

北沢 そういう言い方するなよ。

柳 冗談だよ。

北沢 冗談にならねえんだよ、そういうのは。

柳 そうか。ごめん。

北沢 とにかく、言ってみろよ、その三つ。

柳 うん。じゃあ、第三希望から言うからね。

北沢 いいから早く言え、早く。

柳 第三希望はね、もう一度だけバスケットやりたい。正ちゃんと一緒に。

北沢 そうかあ、バスケかあ。だけど、それは病気が治ればできるじゃん。二番目は。

柳 第二希望はね、ハハハ……ちょっと……言いにくいなあ。

北沢 ほう、なんだ、言ってみろよ。言ってみろ、言ってみろ。そういうのを待ってたんだよ、俺は。

柳 え？

北沢 いいから言ってみろって。

柳 絶対に人に言うなよ。＊＊＊＊＊。(ひそひそと言う)

北沢 ……うーん、やっぱりねえ。キスか、キスねえ！

柳(あわてて)ちょっと正ちゃん！

北沢 よしわかった。とにかく最後まで聞こう。それで第一希望は。

柳 いいよ、第一は。

北沢 いいよじゃねえよ。言えよ早く第一希望を。

柳 いや、それは言えないんだ、誰にも。だから第二希望からでいい。

北沢 わかった。これは俺が悪かった。いやあ悪かった。

柳 なんだよ正ちゃん。なんで正ちゃんが悪いんだよ。

北沢 第二希望がキスなんだからよ、第一希望はあれに決ってるよな。

柳 なんだよ、決まってるって。

北沢 バカヤロウこの。クックック……俺に言わせんなよ。このスケベ。

柳 違うよ、正ちゃん。違う違う。全然違うことなんだ。

北沢 マジで。

柳 うん、マジで。

北沢 じゃあなんだよ、いらいらすんなあもう。

柳 ごめん、わるかった。これは誰にも言えないことなんだよ。だから、第一希望は取り消しにしてさ、第二希望を第一希望にしてくんないかな。な、正ちゃん。

北沢 ややこしいこと言ってんじゃねえよ、まったく。……よし、わかった。じゃあ、キスの話に戻ろう。キスしたことね

えのか一度も。

柳 うん、ない。

北沢 そうかあ。とりあえず俺でよかったらやってみるか。

柳……。(びびる)

北沢 冗談だよ。さあてと、キスねえ……。そうだ、まず 相手だよな相手。おいヤナ、誰かキスしたい相手はいるのかよ。

柳 ……いる。

北沢 おうー、いるか。誰だ、誰、え、言ってみろ、言ってみろ。

柳 ……。

北沢 まさか、麗子じゃねえだろうな、三組の上島麗子。

柳 知らないよ、そんな人。

北沢 そうか、ならいいけど。

柳 正ちゃん好きなのか、その人。

北沢 いいんだよ、そんなことは。それより誰なんだ、ヤナがキスしたい相手は。

柳 三の宮さん。

北沢 えーっ、あの学級委員の、三の宮和子。

柳 どうしてそんなに驚くんだよ。

北沢 いや、別に、三の宮に問題はねえけど……。

柳 なんだよ、はっきり言えよ、気持ち悪いな。

北沢 わかった、わかった、怒るな、怒るな。つまり、非常にこういうことを頼みにくい相手というか、たとえて言えば……

婦人警官をナンパするような感じだな。

柳 この前、クラスの代表でお見舞いにきてくれたんだよ。

北沢 それで、ひとめぼれか。

柳 て言うか、他に知らないしね。

北沢 わかった。とにかくなんとか俺頼んでみるから。まかせろ、な。

柳 だけど、無理だろう、そんなこと。

北沢 三の宮は、小学校から一緒でよ。俺がサンミヤ、サンミヤって言うと、その度に「三の宮です！」って言う気の強いやつでさ。だけど、小学校の時一度俺、いじめられてるあいつを助けたことがあるんだよ。だから、その辺を利用してよ、頼んでみっから。

柳 そうかあ。やっぱりなあ。

北沢 なんだよ……？

柳 正ちゃんはやっぱり小さいころから正義の味方だったんだよなあ。

北沢 ……ばかやろう、そんなことねえよ。

柳 いや、そうだよ絶対。

北沢 違うって言ってんだろう。

柳 正ちゃんみたいな人ばっかりだったら世の中変わるんだけどなあ。

北沢 いいかげんにしろ！

柳 ……。なに怒ってんだよ、正ちゃん。

北沢 別に怒ってねえよ。とにかく、キスだよ、キス！

柳 ちょっと正ちゃん！

北沢 しかしよ、なんと言ってもサンミヤでは可能性がかなり低いからさ、もう一人ぐらい予備がほしいなあ。

柳 予備？

北沢 補欠だよ。サンミヤがだめだった時の補欠。

柳 そんな、補欠なんて。そんな失礼なことできないよ俺。

北沢 わかった、わかった。しかしよ、男はたった一人しか女を好きにならねえってわけじゃないからなあ。もう一人ぐらいいるだろう、好きな人が。

柳 ……。

北沢 いるだろう。

柳 いる。

北沢 ほらみろ。それを言え、早く言え。もうすぐ二十分になるぞ。そろそろ来るぞ主任さんが。

柳 それだよ。

北沢 うん？　なに？

柳 だから、それだって。

北沢 ……えーっ、主任さん?!

主任 (ひょいと顔をだして)あたしがどうしたって？

二人とも大慌て。柳は布団をかぶってしまう。

―暗転―

暗転中ケータイの呼び出し音が続き、やがて消える。
明るくなると、三人が話している。夜の公園らしい。

平山 安川の家は金持ちなんだなあ。こんなに持ってねえよな普通。

数えてから、山崎に金らしきものを渡す。

北沢 それにしてもさ、やっぱ安川はチクらなかったもんなあ。さすがだよな、ヤマちゃん。

山崎 どうする。これでカラオケ行くか。

北沢 あ、わるいけど俺、これからバイトに行くから。

山崎 これから。

北沢 うん、昨日休んじゃったからさ。

山崎 ヒラは。

平山 うん、おれも……。

北沢 彼女か。

平山 うん、まあね。

山崎 なんだよみんな、つきあいわるいなあ。じゃあとにかく、これ、持ってけよ。(二人に金らしきものを分けて渡す)じゃあな。(軽く手をあげて、一人で下手に去る)

平山 (見送って)ヤマちゃん、怒ってんのかな。

北沢 別にそんなことはねえだろう。

平山 そうだよな。相変わらずやってんのか、ボランティア。

北沢 ボランティア？ああ、あれか。やってるよ、しょうがねえから。

平山 何度も行ってんのか。病院に。(平山は、一口飲んだペットボトルを北沢に渡す。北沢も一口飲んで平山に返す)

北沢 ああ、めんどくさくて参っちゃうよ。先生に頼まれたからしょうがねえけどさ。

平山 今度さ、俺も一緒に行ってやろうか。

北沢 うん、……でも無理しなくてもいいよ。デートで忙しいんだろう、ヒラは。

平山 うん、まあ、そうだけど。

北沢 なあ、ヒラ、安川をやるのはさあ、もうやめた方がいいと思わねえか。

平山 ……うん……ヤマちゃんがねえ……。

北沢 ヒラ、これ、ヒラが使ってくれねえか。な、頼むよ(ヒラの手に金らしきものを押し付ける)

平山 なんだよ正ちゃん。今日が初めてじゃねえのに。いまさらなんだよ。

北沢 いいから、頼むよ。

平山は、金らしきものをまるめて地面にぽんと捨て、黙って下手に行ってしまう。

北沢……。

北沢は、平山の捨てたものを拾って、黙ってそれを見ている。

―一瞬の暗転―

突然、三の宮のどなる声が聞こえて明るくなる。夕方の公園か。

三の宮 いやよ、そんなこと！ い、や、です！ バカじゃないの。そんなことできるわけないでしょう。ふざけるのもいいかげんにしてよね。あたし帰るわよ。ばかばかしい。(帰ろうとする)

北沢 ちょ、ちょっと待って、ちょっと待って。(とめる)

三の宮 あのね、正平くん、どうしちゃったの一体。中学校の頃の正平くんはどこへ行っちゃったのよ。陸上部のキャプテンで、あんなにかっこよかったのに。なんか変な人たちとばっかり付き合ってるんじゃないの最近は。

北沢 いいんだよ、そんなことは関係ねえだろう今。それよりさ、な、頼むよ、俺の一生の頼みだからさ。長い付き合いだろう俺たち。小学校からのさ。

三の宮 それとこれとは別でしょう。いやよ、絶対。ね正平くん、それよりもっと自分のことを考えてよ。今度なんかあったら退学なんでしょう。それに欠席も多いし……。

北沢 大丈夫だよ、俺は。

三の宮 ね……今でも、うまくいってないの、新しいお父さんと。

北沢 ……関係ねえだろう、そんなことは。

三の宮 だって、このままいったら、卒業できないんじゃないの。たとえお父さんが嫌いでも、正平くんは正平くんの生活を……。

北沢 うるせえな！ 余計なこと言ってんじゃねえよ！

三の宮 ごめん。

北沢 あ、いや……別に、いいけど……だからさ、……だから言ってんだろう。いまは柳のことを考えてくれって。

三の宮 考えてくれって言われても、考えようがないわよ、ばかばかしくて。

北沢 病気と言ったって、伝染る病気じゃないしさ。

三の宮 そういう問題じゃないわよ！ バカ。

北沢 ……まいったなあ。……あのさ、柳がガンだってことは、先生から聞いてるよね。

三の宮 知ってるわよ。誰にも言うなって言われたから言ってないけど。

北沢 だったらさ……。

三の宮 だからってね、だからって、そんなバカなことできないわよ。

北沢 あのさ、サンミヤ、

三の宮 サンノミヤです！

北沢 ……。ハハ……なんか、なつかしいなあ、それ。

三の宮 ああ、そうかあ。フフフ……ほんとだね。

北沢 なあ、頼むよサンミヤ。

三の宮 イヤデス。

北沢 ……。あのさ、柳は、もしかすると半年ぐらいでさ……。

三の宮 知ってるって言ってるでしょう。でも、だからって、なんであたしがそんなことをしなければならないのよ。学級委員だからキスしなければならないって言うの！

北沢 そうじゃなくて、ヤナが三の宮のことを好きだって言うから……。

三の宮 (北沢を睨んで) やめてよ！ 人の気持ちも知らないで。バカ！(下手に走り去る)

北沢 ……?!

三の宮を見送る北沢の後ろから突然主任の声。
主任上手から登場。

主任 こら正平！ もう一回言ってみな！

北沢 (一瞬びっくりするが)だからさ、この際柳を助けると思ってさ……。(かなり馴れ馴れしい)

主任 馬鹿やろう！ なんてことを言うんだ、おまえは。そんなことできるわけないだろう。

北沢　でもさ、柳はもしかしたら半年でさ……。
主任　あたしは看護師だよ。それも主任だよ。そんなバカなこと
したら、一生が終わりだよ、バカ。
北沢　そんな、キスぐらいでおおげさですよ。
主任　な、なんだよ、キスぐらいって……。
北沢　あのね、キスなんてね、外国では子どもでもやってます
よ。チュッチュ、チュッチュって。
主任　それは外国の習慣だろう。日本では意味が違うんだよ、意
味が。
北沢　たいした違いないですよ。キスはキスなんだから。
主任　おおきな声でキスキス言うなよ、このバカ。
北沢　主任さん、彼氏いますか。
主任　彼氏いるわよ、三人ほど。
北沢　げっ。
主任　なんだよ、その「げっ」てのは。
北沢　だって、彼氏ってのは一人じゃないですか、フツウ。
主任　これから一人に絞るんだよ。
北沢　ということは、特定の人はまだいないということですよ
ね。
主任　だからなんだっつうの！
北沢　ですから、お願いします！
主任　そうはいかないよ。だめなものはだめ！
北沢　あのさ、ほら、あの有名な、看護婦さんの神様、ナイチン

ガール？

主任 ナイチンゲール。

北沢 そう、それ。

主任 どうしたってのよ、ナイチンゲールが！

北沢 そのナイチンゲールがさ、キスしてたよ、患者に。きっと治りますから元気を出すのよ。チュッってさ。

主任 うそつけ。

北沢 見たもん。映画で。

主任 なんていう映画よ。

北沢 「ナイチンゲールの接吻」だったかな。

主任 そんな映画ねえよ。

北沢 ……。ああ、それからね、あの有名なさ、マザーテレサだってさ、キスしてたよ。「神の御加護がありますように」ブチュッって。テレビで見たもん俺。

主任 ほんとなの、それ。

北沢 ほんと、ほんと。

主任 マザーテレサがねえ。

北沢 ね、だからさ……。

主任 だめだよ、もうこの話は終わり。もう今日は帰りなさい。いいわね。

主任が帰ろうとすると、正平はぱっと土下座する。

北沢 主任さん、お願いします。
主任 まいったなあ。あのね、男女のキスっていうのはね、愛情の結果なのよ、ね。だから頼んだり頼まれたりするもんじゃないの。ね、わかるでしょう。金魚じゃあるまいし、気軽にチュッチュチュッチュやってる方がおかしいんだよ。
北沢 だから、ヤナは好きなんですよ、主任さんのこと。
主任 えっ、そうなの……うそ。
北沢 うそじゃありませんよ。
主任 だってさ、普通同級生とかさ、同じ年頃の子を好きになるんじゃないの。
北沢 あいつはアネコンなんですよ。
主任 アネコン？
北沢 お姉さんタイプに弱いんですよ、あいつは。
主任 そうなの。でも、なんかウソくさいなあ。
北沢 うそじゃありませんよ。ね、ですから作戦だけでも聞いてください。ダメならダメでもいいですから。
主任 なに、その作戦って。
北沢 キスってのはタイミングがむずかしいんですよね、初心者には。
主任 なによ、えらそうに。
北沢 あ、すみません。それでね、合言葉を考えたんですよ。
主任 合言葉？
北沢 そう、合言葉。あのですね、もしそういうチャンスがあっ

たら、まずヤナが「月がきれいですねえ」って言いますからね、その時、もしどうしてもキスがだめだったら、「月なんてどこにも出てないわよ」って言ってください。そうすればヤナは諦めることになってますから。なにも言わないで黙っていたらキスＯＫということになります、ハイ。

主任 わかった。わかったけど、だめだよ。正平の友達を思う気持ちはよくわかったよ。そんなにふざけた気持ちじゃないこともわかったけど、できないことはできない。あきらめなさい。(帰ろうとする)

北沢 (また土下座して)お願いします！(泣きながら) ヤナには時間がないんですよ。俺あいつの気持ちがわかるんですよ。お願いします！(ゲンコで涙をぬぐう)

主任、ちょっと立ち止まるが、下手に行ってしまう。

北沢 (顔を上げて、けろっとして) 確率二割五分ってとこかなあ。やっぱり無理かもしれないなあ。ヤナ、お前死ぬのやめろ。もう少し生きていれば、キスなんてさ、女の方からお願いします、お願いしますって、行列ができるんだから……。(今度は本当に泣いているようだ)

テーマ曲が流れ、シルエット転換。

北沢は上手に去り、入れ替わりに柳親子が出て来る。

明るくなると、柳がベッドに座ってマンガかなにか読んでいる。
母親は洗濯物かなにかかたづけている。

柳 母さん。
母 なに。
柳 人はさ、死んだらどこへ行くんだろうね。
母 やめなさいよ、健一。
柳 ね、母さん、どこへ行くんだろうね、ほんとに。
母 やめなさいって言ってるでしょう！
柳 ……。
母 ね、健一、何か食べたいものない。母さんこれからちよっと買い物してくるからさ。なんか買って来てあげるよ。
柳 ね母さん、人間は死んだらさ……。
母 やめなさい！

上手から北沢が顔を出す。

北沢 こんちわー。(大きめのバッグを持っている)
母 あら北沢さん、いらっしゃい。いつもわるいわねえ。
北沢 あ、いや、どうせ俺ひまだから。
母 よかったねえ、健一。北沢さんが来てくれるとね、健一だけじゃなくて私も元気が出るんですよ。ほんとうに ありがと

うね、北沢さん。

北沢 あ、いや……俺なんか、なんの役にもたたないすよ。

母 いいえ！……北沢さんは、あたしたち親子の神様ですよ。

北沢 ……！

柳 いいから、母さんは買い物に行くんだろう。早く行ってきな。

母 ああ、そうだったね。じゃあ北沢さん、わたしが帰るまでいてくださいね。なにかおいしいものを買って来ますからね。

北沢 あ、はい。

母は買い物に出掛けて行く。(上手に去る)

北沢 (バッグを開けながら) おいヤナ、今日はまず、第三希望を実現するぞ。

柳 え、なんだよ正ちゃん。

北沢 バスケットだろう、第三希望は。ほら、バッグの中からボールを出して柳に放り投げる)

柳 (とっさに受け取って) 正ちゃん。

北沢 バスケ部のやつから借りて来たよ。ちょっとやるか。

柳 おう、やるやる。

柳がベッドから下りて二人でパスをしたり、一対一をやったりする。すぐに柳は疲れて立ち止まり、はあは

あ息をきらす。

北沢 よし、試合終了だな。ボールは北沢がもっている)

柳 まだまだ。

北沢 だめだよ、もう。これ以上は無理だよ。

柳 大丈夫だよ。もうちょっとだけ。頼むよ正ちゃん。

北沢 しょうがねえなあ。じゃあラストいくぞ。

再び二、三度パス、ドリブルをした後で。

北沢 ほら、ヤナ、シュートだ！

北沢からボールを受けた柳が上手に向かってドリブルして行き、見えなくなる。

北沢 おい、ヤナ、どこへ行くんだよ、ヤナ！

柳 ……。(すぐに柳が戻って来る)

北沢 ？ ボールどうしたんだよ、ヤナ。

柳 (息を切らしながら)シュートしてきちゃった。ハハハッ。

北沢 ハハハじゃねえよ。しょうがねえな、まったく。(上手に走って行く)

柳、急にがくっと膝をついて崩れ落ちる。

呼吸が苦しい。上手の方を気にしながら、這ってベッドまで行こうとするが、途中で止まってしまう。なんとか上半身を起こしてあぐらの体勢になるが、そのまま顔を床につけるような姿勢で静かになる。

北沢が上手から戻って来る。

北沢 どこにもねえぞボール。どこへシュートしたんだよ、おまえ。どうしたヤナ。大丈夫かヤナ。おいヤナ！　ヤナ！

柳 (ゆっくり顔を上げて)正ちゃん、俺、これでさあ、明日死んでもいいよ、もう。

北沢 ……なんだよ、びっくりさせるなよ。ああ、びっくりした。(へたりこむ)

柳 バスケやれるとは思わなかったなあ……。もう二度と(泣きそうになり)もう二度とバスケなんてできないと思ってたよ俺……。(泣いてしまう)

北沢 ……。

主任 (ボールを持ってとびこんでくる)何やってんのよ、あんたたちは！　ここは病院だって言ってるでしょう！

北沢 すみません。　もう、終わりましたから。

主任 もう終わりましたってねえ……正平、だめだよ、健一くんは病人なんだからね。(意外なやさしさである)(再びもとに戻って)これから私はね、隣にも、下の病室にも全部謝って歩くんだからね。わかってんの、ほんとに！

北沢 すみません。じゃあヤナ、俺もう帰るから。
主任 いいからもう少しいなさい！これくらいのこと気にしなくていいんだよ、男のくせに！

北沢にボールを投げて、怒って行ってしまう。

北沢 ……いい人だよな。
柳 な、そうだろう！
北沢 うん。そうだヤナ、どうした第二希望は。主任さんキスしてくれたか。
柳 正ちゃん！そんなこと大きな声で言うなよ。
北沢 あそうか。(ぐっと小さい声で)どうだ、やったか。
柳 そんなわけないだろう。
北沢 挑戦して見たのか。
柳 してないよ。
北沢 だめだよ、挑戦してみなきゃあ。
柳 だって断られたんだろう、頼んで。
北沢 そりゃあ、一応はことわるんだよ、女は。あきらめちゃダメなんだよヤナ。サンミヤは来たか、見舞いに。
柳 来るわけないよ。変なこと頼むんじゃなかったよ。嫌われちゃったよな俺、きっと。
北沢 そんなことはねえって。そのうちきっと来るよ見舞いに。
柳 いいよもう、その話しは。第二希望は取り消しだ。

北沢 バカ言うなよヤナ、いまさら取り消しだなんておまえ、俺の努力はどうなるんだよ、俺の努力は。俺はなあ……。

柳 正ちゃん、話すよ、第一希望。

北沢 えっ。

柳 死ぬまで誰にも話すつもりが無かったんだけど、聞いてくれるか正ちゃん。

北沢 なんとも大げさなやつだなあ。なんなんだよ、その第一希望って。

柳 正ちゃん、俺の一番の望みはさあ。

北沢 うん。

柳 人を殺したい。

北沢 ……ふざけてんのか、ヤナ。

ベッドの下から箱入りの包丁をとり出し、箱から包丁を出して北沢に見せる。

柳 これでさ、殺したいやつが一人だけいるんだ。

北沢 ……。

柳 俺が転校して来たのはさ、親父の転勤が理由になってるけどね、本当はいじめが原因なんだ。

北沢 ……。

柳 こっちへ来たときは、まだこの病気のこと知らなかったから、一日も早く前のことは忘れて、やり直そうと思ってたん

だ。でも、こうして入院してからはさ、どうせ死ぬんなら、俺をいじめたやつを殺してから死のうと思ってさ。わかるだろう、正ちゃん。

北沢 ……。

柳 それで、病院抜け出してこの包丁を買ってさ……いつか、前の町に行ってさ……そいつを殺したいと思 てたんだ。

北沢、はっと気づいて急いで包丁を箱に入れて、またベッドの下に隠す。

北沢 ひどかったのか、いじめは。

柳 いつも突然ケータイで呼び出されて、金とられて、それからボコボコにされた。

突然ケータイの呼び出し音。脅える柳。舞台はシルエットの状態になる。

突然影の二人(山崎と平山)が乱入して柳をベッドから引きずり降ろして殴る蹴るの暴行を加える。呆然と見ている北沢に影の一人(山崎)がぽんと肩を叩きながら声をかける。

はっと我に返った北沢もいじめに加わる。

北沢は仲間にみせつけるように派手ないじめ方を 繰り返す。

ーやがて、暗転ー

再び明るくなり、元の病室に戻る。

柳　……あいつら、人間じゃねえよ。

北沢　……三人か、相手は。

柳　うん。いつも三人なんだけど、本当に悪いのは一人なんだよ。あとの二人はボスが怖くてしかたなくやってるんだ。あわれなやつらだよ。

北沢　……どうして……話す気になったんだ。

柳　いま、正ちゃんとバスケットやってさ、正ちゃんから受けたボールをシュートしたらさ、何かが……すーっと消えたんだよ。もう人なんか殺さなくてもいいかなって思ったんだ。だから話したんだよ。

北沢　いいのか、それで。

柳　うん。多分ね。そう思えるのは、全部正ちゃんのおかげだよ。

北沢　……違う、違うよヤナ、俺はそんな立派な人間じゃねえよ。

柳　(笑って)わかってるよ、誰も正ちゃんを立派な人間だなんて言ってないよ。

北沢　そうじゃなくて、あのなヤナ、俺はさ……やっぱ、いいや。

柳 なんだよ、正ちゃん。

北沢 うん、今度来た時にゆっくり話すよ。俺帰るよ。(急に立ち上がってバッグを持って帰ろうとする)試験が終わったらまた来るから。

柳 うん……。(帰ろうとする北沢の背中に)正ちゃん！

北沢 うん？(振り向く)

柳 じゃあな、正ちゃん！(明るく笑顔で右手をあげる)

北沢 おっ。(北沢も軽く手を上げる)

二人が手を上げたところで、シルエットになり、一瞬のストップモーション。

テーマ曲静かに流れる。北沢が去ったのをしばらく見送った柳はやがて毛布をかぶって寝てしまう。泣いているようだ。そのシルエットのまましばらくテーマ曲が流れている。

やがて静かに明るくなって、主任が顔を出す。

主任 柳くーん、お友達だよー。どうぞ。

三の宮 こんにちは。

柳 あ、こ、こ、こ、こんにちは。(ラジカセを止める)

主任 じゃあ、面会は三十分以内にしてくださいね。

三の宮 はい、わかりました。(主任去る)今晩はかな、もう。

柳 あ、そうか、そうだよね、ハハハ……。

三の宮 どうなの、調子は。

柳 うん、相変わらずだけど、でも大丈夫だよ。座って、座って。(イスをすすめる。三の宮座る)

三の宮 あのね、明日から一週間試験だから、その前にちょっと寄ってみたの。先生もたまに寄ってみなさいって言ってたからね。あれ、何言ってんだろうあたし。別に先生に言われたから来たってわけじゃないのよ。

柳 そんな、そんなふうに思ってないよ。来てくれてうれしいよ。昨日は正ちゃんが来てくれてさ、やっぱり試験のこと言ってた。

三の宮 試験さえなければ学校も楽しいんだけどね。

柳 あれ、三の宮さんでもそうなんだ。すごくできるのにさ。

三の宮 そんなことないよ。あたし勉強大嫌いだもん。

柳 へえ、そうなの、信じられないなあ。でも、俺みたいに、もう試験受けることもないと思うともう一度受けてみたくなるよね。

三の宮 ……なに、バカなこと言ってるのよ。早く退院して、三学期の試験ちゃんと受けないと、落第しちゃうよ。

柳 そうか、そうだよね、ハハハ……。

三の宮 そうよ。だめだよ、気の弱いこと言ってちゃあ。

柳 うん、ありがとう。

三の宮 この部屋いいわね、個室だから。大部屋だと大変なんでしょう、気を使って。

柳 うん、でも、個室に移されたのは病気が重いからだよ　きっと。同室の人が死ぬと他の患者が動揺するからね。

三の宮 ……。

柳 あ、ごめん、俺また変なこと言っちゃって。一般論だよ、今のは。一般論。

三の宮 まったく。もう帰るからね、あたし。

柳 ごめん、ごめん！ もう少しいてよ、せっかく来てくれたんだから。

三の宮 あれ、そう言えばお母さんは。

柳 うん、今家に帰ってる。夕方は家に帰って弟たちにご飯たべさせて、九時ごろかな、またここに来て、俺が寝てるのを確かめて、それからまた帰る。一日に何度か行ったり来たりするんだ。

三の宮 大変だね。

柳 うん。

三の宮 ……。

柳 夜お袋が来るとね、俺ほとんど眠ったふりをするんだよ。

三の宮 どうして。

柳 うん、まあ、俺が眠ってれば、お袋が早めに家に戻れるしさ。と言うのもあるけど、ほんとうは二人でいるの意外と辛いんだよね。

三の宮 ……。

柳 それでもお袋、一時間ぐらいはここで週刊誌読んだり、居眠

りしたりして、それから帰るんだよ。

三の宮　……。

柳　それでね、この間も眠ったふりをしてたら、お母ちゃんが帰りがけに「明日何か食べたいものはない」って言ったんで、俺即座に納豆って答えちゃったんだよ。夜中に二人で爆笑しちゃったよ。（やっと二人で笑う）

三の宮　（笑いながら）そんなに好きなの納豆。

柳　うん。特にひきわり納豆が好きなんだよね、俺。

三の宮　そう、ひきわりねえ。（まだ笑っている）

三の宮、笑いながらイスから立ち上がって、窓の方へ行き、外を眺める。

三の宮　眺めいいねえ、ここ。

柳　うん、四階だからね。

窓から外の景色をながめている三の宮
三の宮の後姿をながめる柳に北沢の声が聞こえて来る。

北沢　ヤナ、行け、今だ、行け！ヤナ、立て、立って「月がきれいですね」って言うんだ。ヤナ！勇気を出せ、勇気を出して、行け！ヤナ！

柳　（ふらふらと立ち上がって）つつ、つつ、月が、月がきれいで

すね。

三の宮（後姿が凍りついて、下を向く）でも、月なんて……。

三の宮が空をみあげると、そこには月が出ている。柳が後ろから近づいて三の宮の肩に手をかけたところで、

―暗転―

間もなく明かりが戻ると、柳がVサインで立っている。やがて、上手から誰か来た気配に気づきあわててベッドに腰を下ろして、しょんぼりしたふりをする。主任が入って来る。

主任 柳くーん、大丈夫かなア。

柳 ……。（下を向いて黙っている）

主任 なんか元気ないねえ。どうしたの、気持ち悪いの。

柳 あ、大丈夫です。

主任 あそう。そういえば、なんか彼女すごい勢いで走って行ったけど、どうかしたの。

柳 えっ！ああ、なんでもありません。なんか、バスに遅れそうだって、急いで帰ったんですよ。間に合ったかなあ。（などと窓の方に行き外を見たりする）

主任 あそう。だったらもっと元気だしなさい。せっかくガールフレンドが来てくれたんだから。うれしかったんでしょう。

柳 ……。でも俺、自分と同じ年頃の女の子なんて、あんま

り興味ないんですよ。

主任 やばい。

柳 えっ、なんですか。

主任 ああ、なんでもない。じゃあ、薬のんで、すこし休みなさい。

主任、上手に急いで去ろうとする。

柳 主任さん！

主任 はい！(後ろ向きのまま) な、何。

柳 あの、つ、つ、月がきれいですよね！

主任 ……そ、そんな月なんて……。(振り向くと特大の月が出ている) わっ！

柳 わっ！(主任の驚いた様子に柳も窓の方を振り向いて驚く)

どこからか、正平の声が聞こえて来る。

北沢の声 主任さん、お願いします！ 俺、あいつの気持ちわかるんですよ！(泣き声で)

主任 負けたよ、正平。よっしゃ！(と、自分に気合を入れる主任であった)

びっくりして月を見ている柳の後ろに主任が近づいて、

肩にどんと手をおいたところでストップモーション。

―暗転―

明るくなると両手でVサインの柳。

そこに入って来た母親がびっくり仰天。

母 健一 どうしたの、健一！

柳 ああ、母さん。

母 (ベッドに座らせて)大丈夫なの。ね、どうしたのよ、健一。

柳 なんでもないよ、大丈夫だよ、ちょっとふざけてただけだよ。

母 ほんとだね。頭痛とか、吐き気とか、めまいとか、そういうの、何もないの。

柳 大丈夫だって。なにも無いよ別に。

母 ああびっくりした。だって、普通じゃなかったんだよ、おまえの顔。

柳 母さんこそ、どうしたのこんなに早く。

母 なんか今日は胸騒ぎがしてね、台所の後片づけしないですぐに来て見たのよ。だからなおさらびっくりしちゃったわよ。とにかくもう寝なさい。

柳 大丈夫だって。(一度寝るが、すぐに体を起こして)今日さあ、クラスの三の宮さんが来てくれたんだ。さっき帰ったばかりだよ。

母 三の宮さん？

柳 ほら、いつか先生と一緒に来てくれた学級委員の。
母 ああ、あのかわいい子だね。よかったねえ、健一。
柳 別にどうってことねえよ、あんなの。
母 そんなこと言って。それにしても、よかったね、みんないい人ばっかりでねえ。
柳 うん、お医者さんも、主任さんも、友達も、最近みんな俺に優しいんだ。
母 よかったね、ほんとうに。
柳 みんなが優しいのは、俺に、あとあんまり時間がないからだよね。
母 またそんなバカなこと言って。
柳 母さん、死んだらさ、どこへ行くのかな人間は。
母 やめなさい健一。
柳 母さん、死ぬとさ、息が止まるよね。
母 やめなさい！
柳 そうするとさ、死んだ後はずっと息が止まったままなのかな。苦しくないのかな。
母 やめなさい！また発作を起こすと、苦しいのは自分でしょう。
柳 どう思う母さん、俺、恐いんだよほんとうに。どこへ行くのかな死んだら。ね母さんどう思う。ね母さん！ね母さん、(何度でも繰り返す)
母 うるさいね！死んだらね、死んだら天国にいくんだよ、バ

カ！苦しいわけないでしょう！天国に行けば、おじいちゃんもおばあちゃんもいるから、なんの心配もないわよ、バカ！

柳　……。(少し落ち着いて)天国もあるけど、地獄もあるんだろう。

母　悪いことしてなけりゃあ天国に決まってるの！

柳　少しは悪いことしてるよ俺だって。

母　大丈夫だよ！こっそりタバコ吸ったぐらいでは地獄に行かないよ！

柳　……！　なんで知ってんの母さん。

母　知ってるわよ、なんでも。

柳　あれはさ、俺が正ちゃんに無理やり頼んで、一本だけもらってさ……。

母　わかってるよ。でも、もうダメだよ。主任さんに知れたら大変だよ。

柳　うん、それはやばいよね。死ぬ前に殺されちゃうよね、ハハハ……。

母　ばかなこと言って……。

ほっとする母。柳も落ち着いて、少しの間。

柳　母さん、俺、ほんとうに友達ができたみたいなんだ。

母　……そう。よかったね。

柳 母さん、人間の幸せってさ、友達がいることじゃないかな。
母 ……。そうかもしれないね。
柳 だったら俺、今幸せなんだよ、母さん。
母 ……。
柳 一週間でいいから、正ちゃんと思いっきり遊びたいなあ。
母 ……。だから、がんばって、早く病気を治そう。ね、健一。
柳 母さん、正ちゃんは試験があるから、来週一週間は来れないんだ。
母 そう。でも、一週間なんてすぐだよ。
柳 母さん、その一週間の間に俺が死んだらさ、
母 健一！
柳 違う違う、もしもだよ、もしも。多分そんなことはないけど、万が一の時だよ。その時には、正ちゃんに伝えて欲しいことがあるんだ。
母 ……。
柳 ね、母さん、万が一の時だから、ね、聞くだけ聞いてよ。ね。
母 なんなの。
柳 あのさあ……あ、そうだ、正ちゃんに手紙書くよ俺。だから母さん預かっておいてね母さん。
母 ……。（うなづくしかない母）

テーマ曲低く流れて……。

―暗転―

柳にだけスポットライト。

柳 正ちゃん、奇跡が起きたよ。第二希望ばっちりいったよ。おまけにさ、エへへ、奇跡が二度も起きちゃったよ。ちょっとずるかったけど、いいよね、俺には時間がないんだから。おれ、意外に女たらしかもね。へへへ……。正ちゃん、正ちゃんが八十歳か、九十歳になって、こっちへ来たらさ、また一緒にバスケットやろうぜ。それまで、とりあえずサヨナラ。サヨウナラ正ちゃん。あ、一番大事なこと言ってなかった。ありがとう正ちゃん。ありがとう！(下を向いて)ありがとう……。(泣いているようだ)

やがて、柳の右手がゆっくりと上に上がる。「じゃあな正ちゃん」というように。

ゆっくりとスポットが消え、テーマ曲が少しだけ高まる。

夜らしい。薄暗いいつもの公園に北沢が一人でいる。

やがて、上手から山崎と平山が来る。

テーマ曲ＦＯ。

山崎 早かったな正ちゃん。(相変わらずペットボトルを持っている)

北沢 ……。

平山 安川のやつ遅いな今日は。

北沢 安川は俺が帰したよ。

平山 えっ、なんで！なんでだよ、正ちゃん！

北沢 あのさ、ヤマちゃん……もう、安川をやるのはやめた方がいいんじゃないかな。

山崎 どうして。

北沢 ……。

平山 なんだよ、冗談だろう正ちゃん。

北沢 ……。

山崎 どうしたんだよ正ちゃん。なんかあったのか。

北沢 柳が死んだんだ。

平山 ほんとか、いつ。

北沢 昨日の夜だって。

平山 そうかあ。かわいそうだよなあ。でもさ、これで正ちゃんもボランティアから解放されて、よかったじゃん。

北沢 馬鹿野郎！ふざけたこと言ってんじゃねえよ！

平山 ……冗談だよ。

北沢 冗談だと、ふざけんな！

平山 ……わかったよ。(横をむいて)なんだよ、えらそうに。

北沢 なんだと！

平山 なんだよ！

山崎 怒るなよ正ちゃん。柳のことはわかったけどさ、それと安川とは関係ねえだろう。ヒラ、もう一回電話しろよ。まだその辺りにいるんじゃねえか。

北沢 待ってくれよヤマちゃん。俺、本気なんだよ。頼むよヤマちゃん、もう安川のことはかんべんしてやってくれよ。

山崎 わからねえなあ。どうしたんだよ正ちゃん。なあ、柳と安川とは関係ねえだろう、全然。

北沢 (急に土下座して) 頼むよヤマちゃん。安川は柳なんだよ。だから、頼むよヤマちゃん。頼むよ。

山崎 やめろよ正ちゃん。どうしたんだよ、まったく。(北沢を助け起こし立たせる) なんだよ、わけのわからないことばっか言ってよ。

北沢 なヤマちゃん、頼むよ。なヤマちゃん。

山崎 わかったよ。なんだか知らないけど、とにかく今日はもう帰っていいよ、正ちゃん。あとは俺とヒラでやるから。な、そうしろよ正ちゃん。

北沢 ……そうじゃなくてさ、ヤマちゃん……安川のいじめはもうやめようよ。な、ヤマちゃん。

山崎 正ちゃんよ、調子に乗るなよ。俺は正ちゃんとはもめたくねえって言ってんだろう。

平山 正ちゃん、ヤマちゃんの言うように、今日は帰った方がい

いよ。な、正ちゃん。

山崎 いいからヒラ、安川にもう一度電話しろよ。

北沢 やめろよ、ヒラ。

平山 ……。

山崎 早くしろよ、ヒラ！

平山 ……。(迷っているが、ケータイを取り出して掛けようとする)

ケータイを押している平山から、北沢が無言でケータイを取り上げようとする。二人がもつれるが、平山が転ぶ。

テーマ曲が低く流れる。

平山 痛てえなあ。なにすんだよ、この野郎！(立ち上がって構える)

山崎 (北沢を後ろから羽交い締めにして)ヒラ、早く電話しろ！

平山が再びケータイを掛けようとする。

北沢があばれて、はずみで山崎が倒れる。北沢は平山に駆け寄ってケータイをもぎ取って遠くに投げる。

反射的に平山が北沢の顔面を殴る。

よろめいた北沢をさらに山崎が殴る。

北沢と山崎の殴り合いになるが、やはり山崎の方が強い。しかし、北沢は何度倒されても起き上がってかかっていく。また倒される。

北沢が倒れたところでテーマ曲が一瞬止まる。

山崎（息をきらしながら）正ちゃんよ、なんでだよ。なんで、こんなことになるんだよ。わけを言えよ、わけを。

北沢（やっと立ちあがつて）わけ、へへ……たいしたわけはねえよ。ただ……ちょっとさ、ちょっとだけ世の中変えてみようと思ってさあ。

山崎 ふざけんな！（殴り倒す）

テーマ曲再び流れる。

また立ち上がる北沢。やっと止めに入った平山を振り切ってまた殴る山崎。また立ち上がる北沢。蹴りをいれる山崎。

なんとか立ち上がるが、そのまま崩れ落ちる北沢。

山崎は黙ったまま、上手に去る。平山が北沢に駆け寄って助け起こすが、北沢は地面に座ったまま、その手を振り払う。

肋骨あたりが折れたのか、その辺を押さえている。口

の中の血を吐き出し、むせて咳をする。

北沢に振り払われた時に転んだまま、地面に座って見守っている平山。

山崎（上手から声だけ）ヒラ！カラオケに行こうぜ、カラオケ！

平山……。（迷っている）

山崎 ほら、早く来いよ、ヒラ！

平山 いま行くよ！（じっと北沢を見ているが、やがて立ち上がる）

北沢 ヒラ！

平山……。（上手に去ろうとするヒラが振り向く）

北沢 ヒラ、ヒラもさ……ハハハ、ちょっとだけさ……ちょっとだけ、世の中変えてみねえか。なんてね、ハハハ。（笑おうとするが、激しく咳き込む）

平山……。

山崎（上手から声だけ）ヒラ！早く来いよ！行くぞ！

再びテーマ曲が低く流れはじめる。

平山、去ろうとするが、転がっているペットボトルを拾って丁寧にぬぐい、北沢の前に置く。見上げる北沢。

平山は、黙って上手に去る。北沢は、平山を見送った後、目の前のペットボトルに飛びつくようにしてフタを開け、一気に飲むが、途中でむせて咳き込む。しかし、ペットボトルのお陰で、少し落ち着き、痛みをこらえながら呼吸をととのえる。

やがて、ゆっくりと体を起こし、座ったまま夜空を見上げる。

テーマ曲再び低く聞こえている。

北沢 おいヤナ……、バカヤロウお前……、ありがとうなんて、言ってんじゃねえよ。ありがとうってのは、俺のせりふだよバカヤロー……。(かすかに笑っている)またいつか、一緒にバスケット……。(必死に泣くまいとして)またいつか一緒に……。

下を向いて泣き声が漏れるが、やがてゆっくりと北沢の右手が上がる「じゃあな、ヤナ」というように。

テーマ曲が高まって……。

―幕―